

31) 中国の解剖学書にみる東洋医学の思想（その1）（誌上発表）

Oriental Medical Thought on Chinese Anatomy Atlas (No. 1)

医の博物館 陶 栗嫻

Suxian Tao, *Museum of Medicine and Dentistry*

「孝経」には「身体髮膚受之父母。不敢毀傷。孝之始也」（身体髮膚之れを父母に受く。敢えて毀傷せざるは、孝の始めなり）と書かれている。その意味はわれわれの身体、髪ひと筋、皮膚一片にいたるまで、これは父母からいただいた大切なものであるから、この身を大切に慎んで、少しも傷つけないようにすることが親孝行の第一歩である。

古代の伝統的、封建的な倫理観に束縛されて、人体の臓腑を観察することは容易な業ではなかったのである。人間が死後も存在し続けるという考えは普遍的である。エジプトや中国では、死体の保存や埋葬に特に心が配られた。エジプトにおいては、ミイラ作製の技術が発達し、殊に王者に対しては、巨大なピラミッドを造営した。インドでは古くから火葬が行われた。仏教とともに火葬が中国に伝えられたが、中国では死体を大切に保存する習慣が強かったので、人間観、自然観、また宗教によって、古代中国では土葬のほうが多く見られた。湖南省長沙市馬王堆一号墓からは1973年、紀元前168年頃の女性死体が発見された。また楼蘭古屍（楼蘭女性のミイラ状の死体）の発見など、いずれも、古代中国では死体の完全保存を重視していたと思われる。

中国での解剖の第一人者は、清の時代の王清任（1768-1831年）である。1797年頃、欒州の稲地鎮、今の河北省唐山欒県あたりで、疫病のために多数の子供が死んだ時、王清任は共同墓地に行って野犬に荒された30余体の死体の内景を調べた。また刑場にも出掛け、刑死した人の内景を観察し、前人には知られていなかった喉頭蓋（会厭）や胃の

幽門括約筋などを発見した。

それまでの中国では、とくに古代に人体の解剖が行われたらしい。靈樞・経水篇にある「其ノ死スルヤ解剖シテ之ヲ視ルベシ」という文章から推測できる。ただ、古代中国の解剖と言ったら、仏教、道教の生死観に束縛されて、死刑を施された死体に限っていた。最初の解剖記録としては、漢書の王莽伝（紀元16年）に王莽は太医に命じて捕らえられた王孫慶を解剖させ、五臓を測ったことから、五臓六腑を具えた人体の模型が作られたといわれる。宋の時代、1045年欧希範をはじめとする56人の乱党を戮して、解剖した所見が「欧希範五臓図」として伝えられた。楊介の「存真環中図」も例外ではなく、強盗を刑して、解剖して作られたのである。1803年刊行された王清任による書かれた「医林改錯」は古人の先入観、旧説や誤った解剖上の認識を修正した。

1720年頃、宣教師Parreninは康熙帝の命令によってPierre Dionis（?-1718）の解剖書から抜いて満州語の翻訳書「満州解剖図」を3部作った。残念ながら、宮廷のものとして秘蔵され、公開されなかった。五千年の歴史があり、文明度の高い中国が西洋の近代解剖学を吸収する点では遅れることになった。近代解剖学が初めて導入されたのは、1851年イギリス人B. Hobson（合信）が著した「全体新論」であると思われる。

古代中国の解剖学に関する書物を見ると、どうも臓腑経絡システムから離れられなかったようである。仏教、道教、儒家の思想によって支配されていたと思われる。